

# ソロン、詩と政治

芝川 治

【要約】 学説史においては先ず例外なしに前古典期は身分制的秩序の貫徹した時代とされ、古典期とは別の次元において考えられている。しかし、実を言うと、その種の見方は数多くの人工的操作の上に始めて成立するものであり、その根拠は洵に危うい。一々史料を精査していけばその根拠とされるものは動搖を来すのである。こうした作業を数多く積み重ねていく必要があるのだが、今回はソロンを扱う。ソロン改革ではなくその時代における政治の実態が対象である。以下、ソロン自身の詩を分析しつつそれに迫っていく。その結果、「貴族対平民」の角逐なる図像は浮び上ってこない。むしろこの時代の政治は古典期のそれとは必ずしも区別されないのではないか。ソロンの頃においても、アテナイの政治は民衆が相当程度参加するいわば開かれた体系をなしていたのである。

史林 七九巻四号 一九九六年七月

## 序

ソロン改革の解釈なるが、これは学説史において区々様々である。それはアテナイ民主政の出発点とされる事もあるが、他方、それに対しては否定的態度を示す向きもある。その代表としてはヒグネットが挙げられよう。これによるならばソロン改革とは貴族政的秩序の再編成である。ソロンの支持層は困窮に陥った農夫を主とするのではあるが、有力者もその中には少からず算えられた。改革によってもいわず貴族勢力の牙城たるアレイオスパゴス評議会はその権を保持し、民会の地位は事実上変化せず、その構成も従来通りで出席は土地所有者にのみ認められたと言う。ソロンはただアルコンなど役職とひいてはアレイオパゴス会の構成に変更を加えたのみ。これは財産級導入によって旧来における出生の原理が富に

置換された結果という。然るに、この事は新興富裕者層の抬頭を示すものでもない。眞の受益者はピライダイ、ペイシストラトスの一族、アルクメオニダイ等、政權の中樞より排除されていた貴族層である。経済危機はいわばそれらによって利用されたのみ。民衆はこの時点においては未だ自立するには到らぬ。民衆の政治的成長のためには僭主政を俟つ必要があったというのである。「*demos*とは主として僭主創造するところである。」<sup>②</sup>

かくヒグネットはアテナイ民主政発展史におけるソロン改革の意義を些少に評価せんとするのであるが、伊藤貞夫氏はそれよりは穏当である。伊藤氏によるならばソロン以前におけるアテナイの体制は貴族政であるが、これをそのまま維持するのはソロン、なす能わぬところであった。平民の地位が向上していたからというのである。ソロンは財産級を定め、富裕なる平民にも政治的発言権を与えんとした。これよりするとソロン改革はアテナイ民主政の出発点をなしたとも称するを得る。ただし、ソロンは貴族政の骨格は維持せんとしたのであって、事実、彼の改革によって貴族支配が決定的打撃を蒙ったとすべきではないとの事である。

これらヒグネットや伊藤氏の所説はそれぞれ問題を孕むのであるが、これらに限らず学説全般に共通する前提がある。それは前古典期アテナイ政治史を「貴族対平民」という身分闘争の一齣として見んとする事である。これは、一般に、諸家の脳裡に存する事であるが、前古典期が貴族支配の時代であってそこで課題となったのが身分制的秩序の可否。それに対し、古典期には特権身分が没落して、それまで従属していた民衆が自立するに到った。そこで政治史の主軸となったのは富裕者対貧民の抗争なり、というわけである。<sup>③</sup>かく、アテナイ史に構造的変化が設定される事となる。ソロン改革も古典期の抗争とは相貌を異にするものとして分析が加えられる事となる。しかし、それは適切であろうか。本論文はかくなる前提をソロン前後の時期において衝かんとするものである。そのためには予断を排して史料を精査しなければならない。ソロンについては史料は必ずしも僅少とはしないのであるが、それらには後世のもの多しとする故、ソロン当時の状況を誤解している可能性がある。更には潤色が見出され、屢々物語적となり、それらの信憑性は高しとは言えない。然るに、

幸甚なる事に、ソロン自身の詩が相当量遺されている。これらはもとより政治的事件や制度改革については茫漠たる語り口を示すのみである。それにしても、やはり同時代史料に如くものはないのであって、それらの示唆するところは甚だ大きい。それらによつてのみ確実な知識が得られるのである。以下、ソロンの詩篇が歴史的視点より論ぜられる。ここではソロンの思想、行動もさりながら、当時のアテナイにおける政治の様態に焦点が当てられる事になる。それは古典期の政治とは質を異にするのであろうか。その時代における諸勢力の関係、就中、民衆の動向とは如何なるものか。本論文は凡そこういう事をソロンの断片に現れる限りに於いて論究せんとするものである。従つて、言を俟たぬところながら、他の史料を較量した上でのソロン改革の全体的評価などはなすところではない。また、ソロンの詩をめぐつては文学的思想史的観点より数多の分析がなされているが、それらにも立入るところはない。

① C. Hignett, *A History of Athenian Constitution to the End of the Fifth Century B. C.*, Oxford 1952, 86-107.

年、六六一七二ページ。

② *Ibid.* 125. この句は印象的というよりは驚天動地である。この事は

④ 「平民」なる呼称は特徴的である。拙稿「アリストテレスと初期民主政」(『大手前女子大学論集』二八号、平成六年) 六八ページ。

本稿の行論より明瞭となる。

⑤ 同右、六九ページ。

③ 伊藤貞夫『古典期アテナイの政治と社会』東京大学出版会、昭和五七

一

本章ではソロンの詩篇中、初期に属すと思われる作を扱うのであるが、先ず「サラミス」と題される詩<sup>①</sup>。これはサラミス領有をめぐるメガラと対立し、当時、敗戦に銷沈していたアテナイ人を鼓舞せんとして作製された歌である。サラミス争奪戦についてはプルタルコスなど伝承が錯綜し、その経緯を判然たらしめるのは容易ではない<sup>②</sup>。ただ、年代に関してはこの件におけるソロンの活躍はその経歴の比較的初期に置かるべきと思料される。この点はプルタルコスを受入れてよいであらう<sup>③</sup>。

プルタルコスによるとソロンは自身の狂気について噂を弘めしめ、禁令にも拘らず、アゴラに駆込んで、多数の者が参集した時この詩を歌い通した。そしてそれが人々を動かしたという。しかしこの記述には演劇的要素過大なるものがあり、直ちに信を置くわけにはいかない<sup>⑥</sup>。フリーマンによればプルタルコスは時代錯誤を犯す。アゴラにて大衆相手に云々は後世の状況を写すもので、六百年頃においてはそういった事はエウパトリダイに宛ててなされるしかなかった。「サラミス」は当局者の集会にて朗誦さるべく制作されたというのである。

かくなるフリーマン説であるが、これもア・プリオリの論断に基くものでしかない。当時擅権を揮ったのはエウパトリダイであるから、「サラミス」もそれに宛てられた筈というだけの事である。この点は詩そのものよりは断案を下し難いのであるが、以下に触れるソロン初期の詩を勸案するに、「サラミス」はアゴラにおいて朗誦されたとしてよいのではなからうか<sup>⑦</sup>。事実、この詩は広く愛国心を喚起せんとするものでもあるし、饗宴などにおけるよりも、広汎なる大衆に対して訴えられる方が効果は高いものと思われる。

私は識る、そしてイアオニアの最も古き地の切殺されるのを眺めるとき私の心の奥底に苦痛が横たわる<sup>⑧</sup>。

これは危機にあるアテナイの惨状を嘆じた詩である。これはアリストテレスによるとエレゲイア冒頭の一節で、そのエレゲイアの中でソロンは上流富裕者並びに下層民双方を論難したという<sup>⑨</sup>。かるが如く中正を逸せず、かつアテナイ全体を憂慮する姿勢の故に彼は調停者兼アルコンに選任されたとの事である。これはアリストテレスよりするならば上層と民衆 (hoi gnorimoi kai ho demos) 双方の合意によりなされた事になる。この事は『アテナイ人の国制』十二章に引かれたソロンの詩よりも確証が得られる。ソロンの文辞によると、当時、アテナイ社会には二極分解が生じ党派抗争が熾烈に行われていた。その中で彼が調停者選ばれたというのであるから、それは対立せる両派、即ち上層と民衆との合意の下でしかありえない。

これよりすると民衆は自らの生存、権利獲得のために抗争を行ったのである。そして上流階級もそれには譲歩せざるを

得なかつた。ソロンは民衆からも推されたのであるから、その中で輿望を担っていた。これは即ち彼の詩は人口に膾炙していた事になる。ソロンは民衆に対しても政治的に訴えかけた<sup>⑭</sup>と見るべきである。然らば、かかる民衆は政治の客体たるにとどまらぬものがある。隸属の運命が迫切するのを迎えて盲目的に蹶起したというよりは今少し自覚的なものが認められるのではなからうか。改革前よりして民衆は国制上、一定の地歩を占めていた<sup>⑮</sup>かに看取される。

ソロンの政治的思惟をよく物語るのは F 3 G. P. = F 4 W. 所謂「エウノミア」である。これは相当長い詩<sup>⑯</sup>であつて、当時アテナイの窮状を叙し、それに対するに良き秩序支配する世を詠い上げた作である。ここでは先ず、我らがポリス hemetera polis (v. 1) 神々の意嚮によりては滅亡せぬと歌われる。それを滅ぼすのは市民 astoi (v. 6) 自身であり、その中でも特に悪しきは民衆の指導者 demon hegemones (v. 7) とされる。これらは暴虐 hybris (v. 8) を事とし自らの貪欲を制する能わず、掠奪を行い、ディケーさえをも容赦せぬという。全ポリス Pasei poli (v. 17) はこれに苦しみ、隸属、内訌が生ずる。かくなる国民全体の災厄 demosion kakon (v. 26) は各人防遏するを得ずというのである。これらの事をソロンは全アテナイ人 Athenaios (v. 30) に教えんとするとされ、次いでこのような状態に対して良き秩序が叙されてこの詩は終る。

「エウノミア」においてもソロンはアテナイ人のポリス全体を憂えている。それは如上の紹介よりして既に明白である。かくなる全体への配慮は「エウノミア」のみならず他の詩においても随所に現れ、ソロンの思想を貫いている。アテナイが惨状に陥った事につけては人間の自己責任の原則が強調されるのであるが、その中で特に責を負うべきは有力者とされるのであつた。これらにはディケーの報復が必ず来れる (v. 15) とされるのである。かくソロンは上層有力者に対し非を鳴らすのであるが、彼はそこにのみとどまるものではない。非難は市民全体に対しても向けられる。それらも物欲に捉われているからとの事 (v. 9) である。一般に、ソロンは富それ自体を敵視するものではない。しかし富には過度に亘り、自己目的と化する傾向が内在する。この点には万人に共通するものがある<sup>⑰</sup>。不正なる蓄財はソロン強く警めるところであ

つて、これは所謂「ムーサイへの祈り」において詳細に論じられていた。

ソロンは行動を促す。悪しき状態は克服されねばならない。そのために必要なのは何か。此世の事に人間が責を負うとは、同時に改良の方途も人間自身に求められる事である。シニタールの言を以つてすれば、市民は心的態度を改めなければならぬ。当然の事ながら、ソロンにあって国家は各人よりも高次の存在である。それは一体たるべきであり、個々人は野放図なる物欲の追求によってそれを損壊してはならない。かつ、全体の災厄は各人これを避く能わずといふのであるから、市民たる者、一人、超然としているわけにはいかぬ。国家公共の事には思いを致し、応分の責任を果さねばならぬ。

こういった事をソロンは全アテナイ人と呼び掛けるのであった(30)。債務奴隸の問題には「エウノミア」においても多大なる関心が払われていた(31)。別の詩(32)よりして疑うべくもないが、改革者としてソロンは重荷降しを行い、債務奴隸を自由の身とした。アテナイにて奴隸に墮した者のみならず、外国へ売られた者をも解放したという。これによって彼は自由人と奴隸との区別を画然たらしめた。従つて、市民の觀念が明確と化したと考えられる。ソロンよりすれば「我らがポリス」はこれら自由民全体より構成されねばならない。これらはポリスの構成員たるからには、その一人一人が国家に対して責任を負わねばならない。

かくして、市民各人の責任なる觀念がソロンによって要請されたと考えられるが、これはシニタールによればポリス道徳の一本の柱である。今一つはソープロシユネーとされる。これによって暴慢と放恣を抑制し自己を支配すべく努めねばならない。かくソロンは新たな政治倫理の理想を告知し、それによって始めてアテナイ人にとって自ら支配をなす事が可能となったという。従つて、ここに民主政治の思想が誕生したといふのである。

多くの財宝に満ち飽きたる汝ら、胸のうちなる激しき情を鎮めて、大いなる心を適度に保てよ。我らとても従うまじく、汝らもすべてを得る事は能わじ。

これは『アテナイ人の国制』五章三に引用されたもので、もとより詩の一節に過ぎない。飽満 *koros* なる語もソロンには屢々現れる。これに関しては先程の「エウノミア」において富裕者が非難されていた。それと同じく、ここに引用した詩においても富の追求に狂奔するのは上流富裕者層である。アリストテレス記す通り、ここでソロンは富者に対して貪欲を諫止せんとするのである。

この断片に続いて、『アテナイ人の国制』五章三節では、ソロンが詩の初めにおいて「貪欲と傲慢とを」<sup>㉔</sup> 虞れると歌ったと記されている。これは双方とも富者に帰せしめられる事にはなる。ソロンは抗争に関して富裕者の責を専らとする旨アリストテレスはここにおいて記すのだから。

これら二つの詩篇よりすると、ソロンは富裕層に対して厳しい口調を用いた事になる。「吾人従うまじ」というのであるから、ソロンは貧民の側に与しているとの感がある。この句はむしろ恫喝に響くのである。有力者に対する畏怖、屈従の類はそこには見出されない。貧民を糾合して力で以って事に当らんとする可能性を少くとも一度は表白しているのである。

こういった点を強調して、改革前におけるソロンの立場は一方に偏していたと説かれるかもしれない<sup>㉕</sup>。しかし、この種の主張にも過度に亘る一面がある。何故なら、既述の如く、ソロンにあってはポリスの安寧が第一だったのであるから。その中で彼が民衆に好意的であったのは事実である。しかし、史料の不足する中で、改革以前における彼の政治的位置を正確に算定するのは困難である。何れにせよ、上述の如き思想、行動はこの時期十分に成立したのである。

① F 2 G. - P. = F 1-3 W.

② Plat. *Solon* 8-10.

③ I. M. Linforth, *Solon the Athenian*, Berkeley 1919, 249-264.

④ *Ibid.* 39, 264.

⑤ Plat. *Solon* 8.1-2, ㄱ他 Diog. Laert. I. 2.46; Polynain. I. 20.1

など。

⑥ 更にハイシストラトス介在など疑わしき要素もある。

⑦ K. Freeman, *The Work and Life of Solon*, Cardiff-London 1926.

(Reprint, New York 1976) 170-171.

⑧ *καὶ τὸν Σολῶνα πρὸς τὴν ἐπιθυμίαν τῆς ἐξουσίας* の記事などは伝説に属するであろうが、「余

触れ役として来れり」も詩的虚構である。

- ⑩ Cf. C. M. Bowra, *Early Greek Elegists*, Cambridge, Mass. 1938, 76-77; U. Walter *In der Polis teilhaben, Historia*, Einzelschriften 82, Stuttgart 1993, 194-195.

- ⑪ E. K. Anhalt, *Solon the Singer*, Lanham 1993, 122.

- ⑫ F 4 G. -P. =F 4 a W. 三行目⑥ kahnomenon と同じ cf. P. J. Rhodes, *A Commentary on the Aristotelian Athenian Politeia*, Oxford 1981, 122-123.

ソロン詩篇のテクストについては問題が多く、それに立入ると際限がない。本稿ではアリストテレス『アテナイ人の国制』、ブルタルロス『英雄伝』『ソロン』に関しては村川堅太郎氏の訳文（前者は岩波文庫、後者は筑摩書房世界文学全集五）をほぼそのままの形で拝借する事にした。テクスト解釈上問題の生ずる際は註記した。

- ⑬ *Ant. Pol.* 5. 2. ただし、アリストテレスは『アテナイ人の国制』五章三では別の事を述べる。この点は本章註⑩参照。

- ⑭ 拙稿「アリストテレスと古アテナイの国制」(『西洋史学』一六八号、平成五年)三八ページ。

- ⑮ 本論文にてこれ以降扱われる詩はその大多数が民衆に対しても呼びかけられたものである。その事はそれらの内容からして否定すべくもない。

- ⑯ この事は『アテナイ人の国制』十二章に引かれた詩よりも推察出来る。また、次に論ずる「エウノミア」においても民主政的思考が見出されるが、これもソロン以前のアテナイにさなる思想を産出す素地の如きものが存した事を物語るなのであろう。

改革後の民会に全市民の出席が認められた事は本稿四章よりして疑いを容れない。これはソロン改革以前よりしてそうだったのではなからうか。何故なら、以下に示すが如く、ソロンの改革とは民衆寄りでは

はあったが、過激なものではなかったのだから。そうすれば、ソロンは民会におこつてブルロンに任じられたと考えるべきである。これは非常時における例外的事態ではないであらう。二三二頁参照。

⑰ この詩はほぼ完全な形で伝えられているのか否か、殊に冒頭に関については議論が多い。

- ⑱ astoi はテオクレスをブルキモスにも類出するが、それらは「市民」と解して支障はない。astoi は神々と対照をなす(Uniform, *op. cit.* 197) 一、二行目の demou hegenones と区別されているから、それはアテナイ人全体を指す。ソロンの詩は astoi は F 14 G. -P. =F 10 W. 一行目を出すが、これも同様の意味である。

- ⑲ demou hegenones は民主派の指導者という事ではなく、民衆と対置された上層富裕者、有力者を指す。ソロンでは hegenones は F 81 G. -P. =F 61 W. にも現れるが、これはそれ以外の意味ではあり得ない。cf. F 123 G. -P. =F 93 W., F 314 G. -P. =F 374 W., F 73 G. -P. =F 53 W. 更に Theogn. 41, 1082 a, 855 参照。

- ⑳ 一七行目の touto をめぐる事 cf. B. Mannwald, *Zu Solons Gedankewelt*, *Rh. M.* 132, 1989, 6-7; M. Stahl, *Solon F 3 D. Die Geburtsstunde des demokratischen Gedankens*, *Gymnasium* 99, 1992, 391-392; A. W. H. Adkins, *Poetic Craft in Early Greek Elegists*, Chicago and London 1985, 120.

- ㉑ これがテミオトスとは異なり、ソロンにあっては内在的に把握されていること、このガイヤー説(W. Jaeger, *Solons Ennomie*, *SB d. Preuss. Ak. d. Wiss.* 11, 1926, 69-85) とある。周知の通り、この主張をめぐっては多くの議論が戦われつづいた。

- ㉒ F 133 G. -P. =F 1333 W.

- ㉓ Stahl, *op. cit.* 398.

- ㉔ *Ibid.* 401.



一般民衆、貧民を指す事になる。demos なる語は『アテナイ人の国制』十二章中に都合六度現れるが何れもその意味である。<sup>⑤</sup>

このうち、一方の主役たる民衆であるが、その行動には相当に激しいものがある。これは F7 G. -P. =F5 W., F8 G. -P. =F6 W. 及び F31 G. -P. =F37 W. よりも推察されるが、殊に以下の諸篇より明瞭である。先ず F29 b. 1-3 G. -P. =F34.1-3 W.:

彼らは掠奪を目当てに來り、豊かな希望を懐いて各々大いなる幸運を見出そうと予期し、私が柔らかな言葉もて語りながらいつかは荒い心を頭わす事と思つていた。

「彼ら」とはこの詩の少し後に叙されるように土地再分配を指向する徒輩である。これらはソロンが「僭主の如き強力をもつ」<sup>⑥</sup>となる施策を実践する事を期待したのである。次いで F30.20-25 G. -P. =F36.20-25 W.:

他の愚かで貪欲の徒が私のように刺棒<sup>トド</sup>を執つたならば彼は民衆を抑止し得なかつたであろう。もし私が或る時は敵<sup>⑦</sup>の喜ぶところに与し、また或る時は他派<sup>⑧</sup>の彼らに対する要求を行おうとしたならば、この市は多くの人士を失つたであろう。

これらの詩よりすると、アテナイの民衆は徒党をなして行動したのである。それらの者が負債の棒引、隸属の解消、土地再分配を要求したのは明白だが、それは生活苦よりの解放といった側面に限定されたのであろうか。後に引くが、F7 G. -P. =F5 W., F31 G. -P. =F37 W. よりして、ソロンは民衆の政治的権利を一定程度増大せしめたと見られる。然れば、民衆はそういうものをも求めたのである。そして、その点にも激しいものがあつた。ソロンはそれを抑制すべく苦心しているのだから。かつ、F7 G. -P. =F5 W. より、改革前においても民衆が一定の政治的権利を有していた事は明らかである。されば、民衆は本来的に政治への参画を当然視しているのではなからうか。かかる民衆とは何であらうか。本論文序章にて記したるが如き、身分制的秩序の桎梏下に喘ぐ「平民」<sup>⑨</sup>であらうか。それよりは自立的政治勢力ではないであらうか。<sup>⑩</sup>

調停者としてソロンが現実に行ったのは何か。それは重荷セイサケタイア降しであった<sup>12</sup>。彼はこれを「力もて強制と正義とを調和せしめつつ成し遂げし<sup>13</sup>」と歌う。ここで「力と強制」とが何を意味するか、物理的強制力の使用を示唆するか否かは措くとして、ソロンの施策には相当に強引なる一面があったのではなからうか<sup>14</sup>。国外に奴隸として売られた者を故国に連れ戻したとソロンは称する。それらは「或は不当に、或は正当に売られし者<sup>15</sup>」という。然らば、ソロンは法律に違つて処置された者をも無理に解放した事になる。国内における借財や債務奴隸化にしても当時の法律に則つて行われた筈である。ソロンはそれらを破棄したのである。第一、民衆を糾合したのはソロンではないか。

私は色々の目的で民衆を集めたが、そのうちどれを達成せずして手を引いたか<sup>16</sup>。

ソロンにはかくなる勢力を背景として僭主の地位に就く事も可能であった<sup>17</sup>。かかる圧力の下、彼は上層有力者に対し讓歩を強いたのである。上流階級としては、この点、多大の損失を蒙るにも拘らず、屈服を余儀なくされたのである<sup>18</sup>。

次に F7.1-2 G. -P. = F5.1-2 W'.

私は民衆に十分なる権力を与え、その名譽については何も奪ひはせず、また何も加えはしなかつた。

この詩句は国制改革を暗示するものと考えられる。「権力」βερα、<sup>19</sup>「名譽」τιμηなる表現はその関連で解さるべきであろう。しかも「十分なる権力」であるから、民衆にとつて有利な国制改革がなされた事を意味するのではなからうか。その点全く変化がなかつたというわけではあるまい。プルタルコスはそのように受取つてゐるし、<sup>20</sup>アリストテレスもそれに同じいと思われ<sup>21</sup>。

後代の史料によれば、ソロンは民衆法廷を設置した<sup>22</sup>。四百人評議会の創設も彼に帰せられる<sup>23</sup>。これらは何れも民主政の方策である。もとより、これらが史実たるかどうか確証する術はない。しかし、ソロンは後世の伝承においては挙つてアテナイ民主政を進展せしめたとされる。逆方向の伝承など存しない。この点には黙殺すべからざるものがある。この上に次の詩を参看しよう。F31.1-3 G. -P. = F37.1-3 W'.

もし民衆を明らかに非難すべきであるとするれば、彼らは今持つところのものを夢の中でさえその眼もて見た事がなかつたらう  
……。

ここにおいて、ソロンは何らかの民主政的国制改革をなしたと断ずべきであろう。

かくして、従来屢々なされてきた「保守的改革者」としてのソロン像は動搖を免れなくなるのではなからうか。実際、彼が民衆、殊に過激なる者より如何に顧念されていたか。既述のように、ソロンの下で土地の再分配を期す者がいた。もとより彼はさなる矯激なる措置を取るものではない。彼は約束通りに達成したと歌う。しかしソロンが一部の者に誤解を与え、その点で失望せしめたのは事実である。F 29 b. 45 G. -P. = F 34.45 W.

彼らはその頃空虚なる望みを懐いていたが今は私に対して憤りつつ、皆あたかも仇敵を見る如く横眼もて私を見る

「エウノミア」などに見られる思想傾向や、殊に一章に引いた F 5 G. -P. = F 4 b. c W. よりすると、ソロンにはそのように誤解されても止むを得ぬ面があった。<sup>④</sup>『アテナイ人の国制』十二章に収録された詩には、一つには、民衆に向けてその中の過激分子を戒めるといった意図が認められるのである。

F 75-6 G. -P. = F 55-6 W.

私は双方のために強き楯を執って立ち、何れにも不法の勝利を許さなかった。

F 31.8-9 G. -P. = F 37.9-10 W.

私はいわば彼らの戦線の間に境界の如く立ったのであった。

ソロンはこのように中正たる事を標榜する。<sup>⑤</sup>更に彼は民衆を抑止したとか、自らは有力者の友なりなどと歌う。<sup>⑥</sup>これらはソロンが「保守派」たる事の証跡と説かれるかもしれぬ。しかし、現実にはソロンは中正の立場を持したわけではなかった。当然の事ながら、彼は民衆眞貞との非難を受けたであろう。それに対して彼は如上の詩句の中で、有力者や一般人士に向けて自己の所業を弁疏したものと考えられる。<sup>⑦</sup>何れにせよ、これらの詩は政治的発言でもあって、そのようなものは額面

通り受取らるべきではない。政治家の場合はその行為に重きを置かねばならない。さなくば当時の状況を誤認する事になつてしまふ。

- ① 以下、順に F.73 G. -P. =F.53 W., F.81 G. -P. =F.61 W., F.29 b. 9 G. -P. =F.34.9 W., F.30.18 G. -P. =F.36.18 W., F.31.4 G. -P. =F.37.4 W. など、本論一章註⑨参照。
- ② この点は後述、三章参照。
- ③ F.71 G. -P. =F.51 W., F.81 G. -P. =F.61 W., F.30.2, 22 G. -P. =F.36.2, 22 W., F.31.1, 6 G. -P. =F.37.1, 6 W.
- ④ F.29 b. 9 G. -P. =F.34.9 W., F.30.18 G. -P. =F.36.18 W. については三章参照。
- ⑤ この他 demos なる語は、ロマン詩中この三度用いられる(F.12.4 G. -P. =F.9.4 W., F.37, 23 G. -P. =F.47, 23 W.)。最後に挙げた例は不明瞭なるが、それ以外は本文に記したと同様の意である。cf. W. Donlan, *Changes and Shifts in the Meaning of Demos in the Literature of the Archaic Period*, *MLP* 25, 1970, 389; Adkins, *op. cit.*, 120. demos が如き語にあつてはその意味を厳密に規定するのは困難である。
- ⑥ 「敵」とは有力者を、「他派」とは民衆の党派を指示するのである。
- ⑦ 贅言の要もないが、事実の上で民衆は単一の実体をなしてゐたわけではなからう。
- ⑧ 本稿一章一八ページに示唆した事がここにおいて証されたと考えられる。
- ⑨ demos なる語の用法に関して、後世の著作家に比してソロンが相貌を異たするとは認められない。前掲拙稿「ソリストテレスと初期民主政」六八ページ参照。

- ⑩ ヲッキュティテス(L. 126, 7-9)によれば、キロン事件に際してアテナイ人は叛徒の鎮撫のために自発的に行動した。主権の如きものを民衆が有していた事になる。また、アリストテレスによれば、前ソロン期アテナイには政治的権利に関して出生に基づく区別はない(前掲拙稿「アリストテレスと古アテナイの国制」)。ソロン以前アテナイの国制は過度に寡頭政的ではなかつたと見るべきである。アテナイ以外ではメガラの例なども想起されようか。そこでは大略六世紀前半に民主政が成立して、貧民が暴虐の限りを尽くしたという(前掲拙稿「アリストテレスと初期民主政」六一ページ)。ただし、これらは何れも後代の史料に基づく。

⑪ 古期の史料からここではテメルタイオス(F.1 b, 14 G. -P. =F.4 W.)のみを挙げておく。これは大レートラーに関する詩であるが、そこにおける「民衆」が政治的に自立せる存在なる事は明白である。

⑫ キリシアの民衆とは本来的にかくの如きものである。アルカイック期のギリシアには閉鎖的特権身分層は確立されなかつた。「貴族の支配装置」なるものはそこには存在しない。プラトリアはそのようなものではない。この事はソラオ以後の今日、自明である(前掲拙稿「アリストテレスと初期民主政」七二ページ註(e))。

- ⑬ 一章一九ページ。
- ⑭ F.30.15-17 G. -P. =F.36.15-17 W. 一六行目最初の語は *homonai* と読む。
- ⑮ Cf. *Plut. Solon* 15.1-2.
- ⑯ F.30.9-10 G. -P. =F.36.9-10 W.
- ⑰ テクスト並りに解釈にらうとは J. E. Sandys, *Aristotle's Consti-*

*tution of Alcibiades*, London 1912 (New York 1973); Linforth, *op. cit.* 182-184.

① F 29, 29 a G. -P. =F 32, 33 W.

② セイサクタイアは吾人の眼には過激に映るのであるが、当時の人士にとっては必ずしもそうとは限らなかつたとも思われる。本稿一章で示したように、債務奴隷化の進行に対してはソロンは急進進の方なきが如くであった。それは一般の人心にも抵触するものであつた。ソロンは後世の伝承において賞讃を博しこそすれ非難を浴びる事はないが、この事も如上の傍証となる。アテナイ人のポリスとは伝統的にそのようなものであろう。かく視するに依つて、ソロンの頭脳に於てはセイサクタイアは「中庸」とは必ずしも齟齬を来さなくなる。

ただ、そうは言つても、セイサクタイアが果敢な措置たる事は否定し難い。

③ *geras* はむしろ「特権」である。かくなる語を使用したにつけては何か意圖するところがあつたのであらうか。プルタルコス (*Solon* 18.4) では *geras* の代りに *kratos* が用いられてゐる。

### 三

以上に対しては反論がなされるかもしれない。ソロンには貴族政的精神態度が峻然としてあり、その立場より彼は民衆を輕侮し「貴族」に政權を護持せんとしたなどと唱える向きもある。本章ではこうした主張の根拠とされる詩句を扱う。先ず F 81-2 G. -P. =F 6.1-2 W.

民衆は余りに弛められ *antheis* もせず、また力もて強制されもせぬとき最もよくその指導者たちに従うであらう。

これは一説によれば貴族として如何に民衆に対処するかの心得を説いたものである。④

④ *Solon* 18.1-4.

⑤ *Alk. Pol.* 11-12.1.

⑥ *Ar. Pol.* 1274 a 3.

⑦ *Alk. Pol.* 8.4.

⑧ 本篇序論参照。

⑨ F 29 b. 6-7 G. -P. =F 34.6-7 W., F 30.17 G. -P. =F 36.17 W.

⑩ Cf. *Rhodes, op. cit.* 173.

⑪ 更し F 30.26-27 G. -P. =F 36.26-27 W.

⑫ F. 30.22 G. -P. =F 36.22 W., F 31.6 G. -P. =F 37.7W. F 8 G. -P. =F 6 W. 並ひし F 29 b. 8-9 G. -P. =F 34.8-9 W. 以下は次章参照。

⑬ F 31.4-5 G. -P. =F 37.4-5 W.

⑭ ソロンは民主政的傾向を有してゐたのであつた。従つて、彼自身の主観よりすると自らを中正と目した側面もあつたろう。なお、本文に記した二つの断片はソロンの変節を示すものではない。cf. *Spain, op. cit.* 123, 147.

ところで、この断片に示された民衆観であるが、「弛める」などといった表現はアリストテレスやプルタルコスにも稀ではない。一例を挙げるに、プルタルコスのペリクレス伝十一、四、「ペリクレスは民衆に対し手綱を弛めて」。そもそもソロンのこの詩句は、続く三、四行よりも知られるように、民衆が放逸に流れるのを警戒する事にその本旨がある。④ さればここに歌われたのは主体性を有する民であり、プルタルコスなどに現れる古典期の民衆に比して根本的差違は認め難い。⑤  
次いで F 29 b. 8-9 G. -P. = F 34.8-9 W.

また私は祖国の豊かなる土地に貴い人々 esthloi が賤しい者 kakoi と同じ分前 isomoria を持つ事を好まない。

これは土地再分配を希求する過激派を擯斥する旨述べられた箇所である。この際注目されるべきは esthloi-kakoi なる対照が現われる事である。esthloi とは対立する両派のうち有力者を指す。kakoi は他の一派を示す。agathoi, aristoi, eugeneis, beltistoi, kaloi kagathoi などと kakoi, poneroi を対照せしめる事はギリシアの詩文において常に行われるところである。通常、これは身分的較差を表すものと考えられている。ソロンにおけるこの種の語彙も身分を示す術語として使用されていると言われる。⑥

ソロンに現れるこの種の対照を順次挙げてみよう。先ず F 1.33 G. -P. = F 13.33 W.

我ら死すべし人間は良き者も悪しき者も agathos te kalos te kakos te かく考ふる

次いで F 30.18-20 G. -P. = F 36.18-20 W.

私は何人にも真直な正義を適用して捉を賤しい者にも貴い者にも toi kakoi te kagathoi 平等に書上げた。

一般に agathoi-kakoi などの区別は社会的、倫理的両様の意味において行われ、その何れに用いられたか判断に苦しむ場合も少くはない。この点でこの区別は既にして曖昧なのである。上記ソロンの例も前者はここにおいて判別の困難なところである。そこではむしろ倫理的に使用されているのであろう。何れにせよ、上記一例においては agathos と kalos は同等に扱われている。

F 6 G. -P. =F 15 W.

悪人 kakoi で富み、善人 agathoi で貧しい者が多い。しかし我々は彼らの富と我らの徳とを交換する事はなからう。徳は確固たるものなのに、財宝は時と共に持主の変るものだから。<sup>⑨</sup>

ここでの agathoi、kakoi は社会的意味において解されるべきであろうか。それならばこの詩篇は下層民が成上り、かつての富裕者名門たる者零落せる事頻繁なるを歌うものとなる。さればこの詩は、当時、社会的流動性大なるを示す事となる。しかしこれは倫理的意味に重点が置かれるのではないだろうか。そうであるならば、ここでは富者が道徳的に非難され、むしろ貧者が賞讃されている事となる。その場合でも「財宝は時と共に持主が変る。」というのであるから、やはり社会的上層と下層との階壁は小なりと言わずばなるまい。<sup>⑩</sup> なお、この詩に関してソロン自身の価値観に一言しておく、プルタルコスも指摘するように、彼は富裕者層に反感を抱いたものと目される。<sup>⑪</sup>

先に掲げた詩句「民衆は余りに弛められもせず、また力もて強制されもせぬとき最もよくその指導者たちに従うであらう。」に続くのは以下である。

心の全からざる人々に大いなる幸運の従うとき満足は傲慢を生むものゆえ。

これはテオグニス集一五三——一五四「心の全からざる悪しき者に幸運の従うとき満足は傲慢を生む。」とほぼ同一である。主要なる相違はソロンが「心の全からざる人々」と人間一般につき語るのに対し、テオグニスではそれが「悪しき者に kakoi anthropoi」と置換される事である。これは両者における関心の所在を示すものである。テオグニスは kalos を断罪する。それには心の全き者が如くである。さなる者は agathoi の中に見出し得るというのであろう。<sup>⑫</sup> それに対してソロンはそのような観念を抱懐しない。彼にとつては人間一般の能力が肝要であったと見られる。然らば、ソロンには agathoi 若しくは esthloi を kakoi より峻別する態度が乏しいのではないか。<sup>⑬</sup> 況んやそれらのうちの前者に左袒するものではなきやうである。

しかしそれにしてもソロンはイソモイリアを拒絶するのであった。その点では *esthloi* と *kakoi* を区別する。またソロン自身の価値観は措くとして、当時、世間一般において *agathoi*, *esthloi* と *kakoi* との区別が行われたのは事実である。かく以って観ずるに、その時点においては猶貴族勢力強大であり、ソロンはそれに十分抵抗し得なかつた。従つて、彼の改革は不徹底に畢つたなどと主張されるかもしれない。

これについて、先ず、『アテナイ人の国制』十二章にてソロンの詩を引くアリストテレスである。これはソロンの詩に通曉していた。今日散佚した作品にも知識を有していたと考えられる。かくなるアリストテレスたるが、これはソロン体制を第一種民主政と見る。そこでは財産級が定められて上流の立派な人が役職に就任し、民衆が役人選挙などに参加して貧富が程良く按排される。<sup>⑤</sup> 簡単に表現するならば、アリストテレスにとって当時の抗争は *gnorimoi* と *demos* との間で行われたのである。これは富裕者対民衆と称するのと同義である。「貴族対平民」の争闘なる観念はアリストテレスの念頭には存しない。彼にとって四世紀の政治史とは *gnorimoi*, *eugeneis* と *demos* との対立を主とするものであつて、その点では前古典期とは些の逕庭もない。アリストテレスにおいて政治史の主役を演ずるのは時代の如何を問わず常に富裕者、貧民、或は有徳者であつて、前古典期も古典期も構造的には同一のものとして把握されるのである。かくなる思考と異質なものをアリストテレスはソロンの詩には見ない。彼にとってソロンの *agathoi*, *esthloi* は上流富裕者層を漠然たる形で示すし、同時に倫理的意味をも包含するであらう。他方、*kakoi* は倫理的なると共に貧民たる意を中心とするであらう。<sup>⑥</sup>

*agathoi*, *esthloi* と *kakoi* との区別は抒情詩、エレゲイアにおいて屢々なされるのであるが、ここではソロンと時代を近くする事でもあるし、テオグニスのみを瞥見する事にしよう。<sup>⑦</sup> 下層民を蔑視する事甚しき他ならぬテオグニスである。周知の如くテオグニスの詩篇においては *agathoi* が地位、財産を喪失し、その代りに *kakoi* 成上るといった事態が慨嘆される。ポリスの様相一変し、かつて鄙の卑しき者今や市中を闊歩し *agathoi* に成了す。衆人さなる手合の来歴を知ら

ずというわけである。<sup>①</sup> agathoi, esthloi は今や金銭のためとあれば kakoi と婚姻を結ぶにも躊躇しない。<sup>②</sup> kakoi を上層に迎えるのにも何ら抵抗感がないというのである。

これが物語るのは何であろうか。メガラにおいては agathoi, esthloi と kakoi なる区別は存した。然るにそれは容易に打破され上下両層置換する。これは本来的に両者の較差が僅小であった事を意味するのではないか。<sup>③</sup> テオグニスの主観は別として、agathoi などといっても、それは閉鎖的身分を形成しなかつたであろう (strukturbedingte Offenheit)。<sup>④</sup> くなるテオグニスの例は隣国アテナイを考察する上で大いに参考に供さるべきである。

今度は年代を大きく下げてみよう。上下両層に人々を分ち、下層民を軽侮する事は五、四世紀においても行われている。偽クセノポン『アテナイ人の国制』などその典型と言えようか。これも周知であるが、そこでは上下が峻別され上層は chrestoi, beltistoi, gennaioi など、下層は poneroi などと呼ばれている。後者が唾棄すべき存在として扱われるのは言を俟たぬところである。五世紀末葉では今一つアリストパネス『蛙』<sup>⑤</sup> のコロスのみを挙げておこう。ここでは当今における世の乱れを糺さねばならぬ旨歌われている。poneroi を用いるのではなく kaloi, kagathoi, eugeneis などが然るべき地位に就く正しい時代を復活せしめねばならぬというのである。四世紀に入っても、<sup>⑥</sup> 例えばアリストテレスにおいて同時代の上流階級は gnorimoi, eugeneis, kaloi, kagathoi, beltistoi 等であった。それらには敬意が払われているのである。

これを以てすると、上下を分つ精神態度はギリシア史を長期に亘って貫いている事になる。甚だ興味深いところであるが、五世紀に入ってから上下の差違を示す語に關して変化が生ずると言われる。<sup>⑦</sup> それ以前には上流を表す語が agathoi, esthloi 程度であったのに対し、それ以降 kaloi, kagathoi, beltistoi, gnorimoi, chrestoi 等、表現が多彩となったとされる。かつまた、意味が強調されるようになったと言ふべきであろう。下層民を示す語もそれに応じて多様となったのである。これの意味するところは何であろうか。従前緩やかであった上下の較差が古典期に入ってから拡大かつ固定化したのであろうか。上記の語彙のみよりするならばそう主張せざるを得まい。それはここでは措く。<sup>⑧</sup> ただ、この事よりすれ

ば、アルカイオス、テオグニス等に強く存した「貴族」としての身分意識が五、四世紀には消滅したなどは唱え難き結果となる。実のところ、アルカイク期の詩における *agathoi*, *esthioi* は特別の範疇を形成するものではないのである。古典期の人がそれらの語に接した場合、異和感を喚起される事はなかったわけである。

以上、簡単な考察に終始したが、それを総合するとソロンにおける *agathoi*, *esthioi* は如何に解される事となるうか。それらは社会的には漠然たる形で富裕者、有力者を指す。 *kakoi* は民衆、貧民でもある。「*esthioi* と *kakoi* に等しき分前を」拒絶す、とはソロンが身分制的支配秩序を護持せんとした事を意味するものではない。彼の詩に特権的身分などは姿を見せぬではないか。ソロンは上流と下層の間に自からなる差別を<sup>27)</sup>付けんとしたのみである。これはアリストテレスの第一種民主政理論によって解明出来る。

① P. A. L. Greenhalgh, *Aristocracy and its Advocates in Archaic Greece, Greece and Rome, 2 Series 19, 1972, 193-196.*

② *Ibid.*, 195. これによればソロンは貴族として貴族政の持続を欲した。そのためと同輩貴族に対して倫理的自浄努力を求めたという。その点で民衆の事をも配慮せねばならぬ旨、本文の断片は説いたとごうわけである。

③ ホムーン (*op. cit.*, 147) によれば、当時、民衆は未だ自立せずして指導者を必要とする。本文に掲げた一節は指導者層に宛てて民衆の取扱いを注意したものと云う。

④ 前掲拙稿「アリストテレスと古プラテナイの國制」三五ページ。

⑤ Linforth, *op. cit.*, 181; Rhodes, *op. cit.*, 173.

⑥ 本文の句は「ブルタルコスも引くところである」(*Sol. - Plat.*, 2.3)。それをブルタルコスは「貴族対平民」なる次元では考えない。

⑦ もっとよりの頃の民衆は古典期のそれと比較すれば政治的成熟度において劣る。その点は四章註③参照。

⑧ ソロンの場合 *esthioi* と *agathoi* 以外にも有力者の呼称は多数見出され、かゝるものは曖昧である。本稿一二三ページ参照。

⑨ B. J. Schulz, *Bezeichnungen und Selbstbezeichnungen der Aristokraten und Oligarchen in der griechischen Literatur von Homers Aristoteles, Soziale Typologie* 3 (herausgegeben von E. Ch. Weiskopf) Berlin 1981, 83.

⑩ これはテオクニス集三一五—三一八と同じ。

⑪ 「ムーサイへの祈り」からは成上り者の存在が知られる。そこでは財産喪失の可能性が繰述されるし、当時、相当の為転変が見られたのであろう。ソロン自身の一家もそう伝えられる (*Plat. Solon* 2) が、社会的に上昇、下降する者少しとはしなかつたのであろう。なほ、ムガラにおける状況については後に触れる。

⑫ 「ムーサイへの祈り」も全般に庶民的である。そこでは生業に勤む通常の民が描出されるし、蓄財の話が多くを占める。「金が人を作る」とのアルカイオスの詩も想起される (*E 360 L. - P.*)。そうした点

で、バイゼンヘルガーの所論(H. Eisenberger, Gedanken zu Solons „Musenelegie“, *Philologus* 128, 1984, 9-20) にも所収である。

⑩ Solon 3.2.

⑪ 本文に掲げた断片は富の豊か、空しさを述べている。それに対して唯一持統するのは徳とどう事でも、徳が賞讃されるのである。これらの何処が「貴族的生活理想」なのであるのか。F. 6 G. -P. F. 15 W. には社会秩序が固定していらた昔を懐しむとか、徳を「貴族」の占有物視する(Schulz, *op. cit.* 82-83) といった心的態度が示唆される。

ソロンの価値観は全般的にわがわが小市民的であつて、F. 18 G. -P. F. 24 W., F. 17 G. -P. F. 23 W. によれば背馳するものではない。彼の有する庶民的価値意識はセキニテス、ホキアテリス或はアルキロリスとも通じ、アルカイタの詩における一つの伝統を形成するものではない(W. Donlan, The Tradition of Anti-Aristocratic Thought in Early Greek Poetry, *Historia* 22, 1973, 145-154)。

⑫ Anhalt, *op. cit.* 96-97.

⑬ 政治に関してソロンの詩は kakoi を含めたホリスの全成員を対象とするものではない。なお、cf. G. Nagy, Theognis and Megara, *Theognis of Megara* (edited by T. J. Figueira and G. Nagy) Baltimore and London 1985, 24.

⑭ 前掲拙稿「プリストラテレスと古マテナイの国制」三五ページ。「プリ

ストラテレスと初期民主政」七一ページ。

⑮ 拙稿「プリストラテレスと古期の寡頭政」(『古代文化』四七巻七号、平成七年)四ページ。

なお、富裕な人は教養を積む故、立派な人になる事が多いというわけである。

⑯ アルタルロスの場合もプリストラテレスと同様に考えて支障はない。

⑰ ここではテオクリスをめぐる学説には立入らない。以下の記述に關しては cf. E. Stein-Holteskamp, *Adelshutur und Politgesellschaft*, Stuttgart 1989, 86-93.

⑱ E. g. Theogn. 53-60.

⑳ E. g. Theogn. 183-192.

㉑ テオクリスの問題は一つの議論を必要とする。

㉒ Stein-Holteskamp, *op. cit.* 93.

㉓ 718-737.

㉔ Cf. Schulz, *op. cit.* 118-122.

㉕ W. Donlan, The Origin of *Karās kratades*, *AJP* 94, 1973, 366-367.

㉖ この問題も更なる考究を必要とする。

㉗ Cf. F. 7 G. -P. F. 5 W. この詩は財産級を暗示する可能性がある。

#### 四

ソロンの晩年に話は移るが、その頃ペイストラテスはしきりと僭主の地位を窺っていた。それに対してソロンは強硬に反対した。国家を公共の物と考え、法による支配を樹立せんとするソロンにとってそれは当然の行動である。① その際物

されたと言われる詩が若干伝存する。F. 12.1-4 G. -P. = F. 9.1-4 W.

雲から雪や霰は来り、光る稲妻から雷鳴は生じる。そのように大いなる人々より国家は滅び、民衆は無知の故に独裁者の隸属の下に陥る。

これはまさに来らんとする僭主政を警戒すべく民衆に注意を呼びかけたものである。<sup>②</sup>

ペイストラトスであるが、ヘロドトス語るところによればこれは自らを傷つけてアゴラに赴き、それを敵方の所為と称して国民<sup>デイモス</sup>に対して護衛を要求した。アテナイの国民<sup>デイモス</sup>はその術中に陥って護衛を認め、そのためにペイストラトスが僭主政を樹立する結果となったという。同種の話はアリストテレス、プルタルコス等にも見出すを得る。そのうち『アテナイ人の国制』によれば、アリストイオン<sup>⑦</sup>なる人物の動議によって護衛授与が決定されたとの事である。このように提案者の名前も伝えられているのである。されば、当時、実際に民会において議決がなされたと見るべきである。この事はヘロドトスなど古典史料の信憑性を高める。ペイストラトスは一般国民の間で人気を博し、それを煽動して民会において有利な決議を成立せしめ、それで以って僭主の地位に就いたのである。こうした事情は次に引くソロンの詩からも裏付を与えられる。

汝らが自らの卑怯の故に悲しい目に遭ったとしても、その事の責任を神々に帰する勿れ。自ら護衛を与えてこの連中を成長させ、その酬いに恥ずべき奴隸に落ちたのだから。汝らの一人一人は狐の足取りで歩いている。しかし一緒になると汝らの頭は空っぽだ。言葉巧みな男の舌と言葉に目を奪われて、實際行われる事には注意しないのだから。<sup>③</sup>

この詩はペイストラトスが愈々権力を奪取した後<sup>④</sup>に作製されたと伝えられる。<sup>④</sup>その事は全体的内容と、殊に「護衛を与えて」より首肯されるであろう。<sup>⑤</sup>この句は如上の民会決議を指すと考えられるのである。

アテナイ人全体に向けられたこの詩において、ソロンはそれらを激しく非難する。アテナイ市民は一人一人が国家公共の事に思いを致し、暴虐なる支配を防止すべく努めねばならない。ソロン体制下、アテナイ大衆はそのような役割を期

待されそれに応じた制度的前提を与えられていた筈である。それにも拘らず人々は自らの責務を忘却し、遂には隷従の憂目に遭うに至った。この点で自らの責任を問われなければならない。こういった事をソロンは語るのである。

かくして、本章に引いた詩からもこの頃の政治につき貴重な知見が得られる。それはいわば開かれた体系をなしていたのである。⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

① ㉙ アリスタルコンのかへなる行動は 'aristocratic equalitarianism' (Greenhalgh, *op. cit.* 193-194) に著しやうとせむ。

② ソロンは「この事を民衆におぼたせしむ」といふ。Diod. Sic. IX. 20.1; Plut. Solon 30.2-3; Diog. Laert. I. 49. ただし「これらは何れも後代の史料である。なおアリスタルコスは本文に掲げた詩の「二行のみを引くが、それは別の関連においてである。」

③ I. 59.4-6.

④ *Alh. Pol.* 14.1.

⑤ *Solon* 30.1-3.

⑥ *Rhodes, op. cit.* 200.

⑦ プルタルコスではアリストン。

⑧ ㉙ トリコは民衆決議がそのまま保存されたところではない。

⑨ それは口承に拠ったものである。

⑩ F 15 G. -P. = F II W.

⑪ Diod. Sic. IX. 20.3; Diog. Laert. I. 2.51-52. cf. Plut. Solon 30.

## 結

以上、ソロンの詩を探究したのであるが、学説に対してその齎す結果は何か。序章に記したように本論文にて問われるべきは諸学説の前提であった。「貴族——平民」なる概念装置はソロンの詩に対しては適用し難い。そこには閉鎖的特権

⑱ ヴァンキークマン (U. von Wilamowitz-Moellendorf, *Aristoteles und Athen* II, 1893, 312) は「この詩は『ソロン』の詩が必ずしもアリスタラトスに向けられたものでない」と論ずる。リンフォーク (*op. cit.* 207) もこれに同調する。(リンフォークは三行目末尾に閱して *hystia dontes* を採る。) しかしマテナイが僭主政に落ち込んだのはエイシストラトスの時のみであるし、「護衛を与えて」はエイシストラトス権力掌握時の状況に正確に符合するよう思われる。

⑲ F 14 G. -P. = F 10 W. 「少くの時が私の狂気たるか否かを市民たちには *astois* 明らかにするたがう。真理が公の場へ *es meson* 現れるやの時には。」この詩が僭主政防止を意図して制作された (Diog. Laert. I. 2.49) とするならば、これもその事を全真に呼びかけたものとなる。それは *astois* において明白である。 *es meson* もそれと同様、公共性の原理を示すものとなる。

⑳ ただし「エイシストラトスとメガクレスの関係 (Hdt. I. 60-61) など」を言えない要素もある。本論文三章註㉑参照。

身分層や隸屬せる平民などは出現しない。詩に徴する限りにおいては、ソロン前後の政治は古典期と同様の枠組の中で理解すべき事となる<sup>①</sup>。この点はアリストテレスなど古典史料とも一致するところである。

かくなる結果は重要である。それは発想の転換を求める事となる。ここから今後の展望につき若干蕪辭を連ねるのであるが、従来の如き身分的支配云々なる視角は維持困難となるのではないか。もとより、前古典期の政治、社会構造に関して筆者の分析は未だ微々たるものにとどまる。しかし現段階においても次の事だけは確実に主張し得る。即ち、前古典期アテナイにおいては上下の較差は通常考えられるよりも小なる事、これである。そこには厳格なる身分的支配などは本来的に存しなかったのではないか。そうとするならば、アテナイ史に関して時代を越えて一貫した分析の手法が必要となってくるのではないだろうか。

かくして、前古典期アテナイ政治史の諸事象は再検討の俎上に載せられざるを得なくなる。アテナイ民主政にしても、それが貴族の特権を剝奪する事によって進展したなどは解されなくなる。事実、ソロンやクレイステネスの改革にはそのような面は見出されない<sup>②</sup>。また、アテナイ民主政の成立は早期に設定される事となる。それは、当然の事ながら、ソロン改革に置かるべきである<sup>③</sup>。それが民衆寄りなる事はソロンの詩篇よりして否定すべくもないところであった。かつまた、当時、民主政への条件が一定程度醸成されていた事も彼の詩より知られるところであった。そうすればソロン以前の社会も再検討に委ねられねばならなくなる。かくなる結果よりすれば、貴族政から民主政へという直線的発展論も修正を余儀なくされる事となろう。従前の觀念によればさなる過程は不可逆的であり、「貴族身分」は衰滅の定めにあるというものであったのだが<sup>④</sup>。もっとも、これらの再検討作業は相当の労力を必要とする。筆者にとって今後果すべき課題は山積していると言わずばなるまい<sup>⑤</sup>。

① もとよりソロンの民主政や当時の民衆は後世のそれらとは様相を異にする。アリストテレスならばその理由としては人口増、都市拡大、

戦術の変化を指摘するところである(前掲拙稿「アリストテレスと初期民主政」六九ページ)。人口増はともかくとして、この方が「貴族

身分」の衰頹などと唱えるよりは合理的ではなからうか。

② 拙稿「クレイステネス改革をめぐって（一）」（二）、（三）（『大手前女子大学論集』二〇、二三、二三号、昭和六一、六三、平成元年）。

ソロン改革そのものについては別に扱う機会が生ずるであらう。

③ 本篇序章にて紹介したヒグネットの学説を想起せよ。

④ 前掲拙稿「アリストテレスと古期の寡頭政」七一八ページ。

⑤ これはアテナイ史若しくは政治史にのみ限定されるものではない。

例えば文化に関してであるが、ギリシア文化は貴族的たる事を一つの特質とする。そうした特質は現実における「貴族身分」の存在に由来たらしめられなくなる。

⑥ 言う迄もなきところながら、政治史再構築の試みは史料に即した形で行われなければならない。筆者がアリストテレス論において再三指摘したように、従来 of 学説には先入見に捉われて史料を誤解した一面がある。そうした誤解はソロンの詩作品解釈においても散見される。

（大手前女子大学教授

# Solon, Politik und Dichtung

von

SHIBAKAWA Osamu

Die Quellen über Solon sind nicht gering. Doch stammen sie im großen und ganzen aus späterer Zeit, so sind sie im allgemeinen anekdotisch und unglaubwürdig. Aber uns sind die Dichtungen Solons überliefert. Im vorliegenden Aufsatz sind sie vom historischen Standpunkt aus untersucht. In der Erforschungsgeschichte herrscht die Meinung, daß in der damaligen Zeit ganz Athen von der Aristokratie standesartig regiert und das Volk rechtslos war. Aber aus Solons Dichtungen ergibt sich nicht das Bild des Kampfes um die Standesordnung, sondern der Kampf zwischen den reichen und den armen. So ist die Politik der solonischen Zeit, strukturell gesehen, sozusagen offen, und von der der klassischen Zeit nicht unterschieden.